

サヒブ・ジャマル  
歴史学博士

# 第一代共和国の最後の春

アゼルバイジャン民主共和国—ボリシェビキのロシア及びケマルのトルコの戦  
略—

アゼルバイジャンは、全19世紀と20世紀初頭を通し、世界政治に於いて重要な役割を果たしてきた。北と南、ヨーロッパとアジア、黒海とカスピ海、キリスト教圏とイスラム教圏のような戦略的な岐路に立ち、その重要性は独特な地理的位置によって決定されてきた。

ロシアの地政学的なライバルであるオスマン帝国及びペルシア帝国の国境に近いことにより、アゼルバイジャン封建国家、そしてその人口がロシアの外交政策（その後、国内政策も）の範囲に加入することに原因し、戦略的に重要な本地域を左右することが

賞である「ザカフカージェの大ゲーム」の対象とさせた。その戦いは、ロシアは最初に自己の慣例的な競争者と交えたのだが、その後は英国、ドイツ、またフランスも含まれた。全般に、二世紀にわたり、ロシアの本地域に於ける位置強化はその国際権威及び影響力の増加を促進し、位置弱体化は常にコーカサスのみならず、ヨーロッパでのロシアの軍的・政治的な退却をする要因となっていた。

1971年2、3月にて独裁政体の瓦解（独裁政権の崩壊）とともに、徐々にアゼルバイジャンの自己発展が故の前提条件が確立され始めた。そも

そも、その主要な政治勢力は、ロシア民主連邦共和国の枠内でのアゼルバイジャン領土自律性を確保するような、まだ20世紀初頭に形成した方向性に従っていた。アゼルバイジャンの民族民主運動の最大限の課題としては、防衛、外国人、金融、関税政策の分野で中心的なロシア政府当局を残したまま、国内問題（行政、立法、文化、金融、経済、司法）に関するアゼルバイジャンの独立性があげられた。

しかしながら、ロシア歴史がアゼルバイジャン人を含めてザカフカージェ人民には、より勇敢な政治的なプロ



アゼルバイジャン民主共和国の閣僚会議

プロジェクトの実現・実施の機会を与え、アゼルバイジャン民主共和国のリーダーの一人が指摘したとおりに、「（前略）それは、政治的文化的な理想の将来”機構”のために苦勞し抜いてきた、彼らの目的性、そして宗教的・歴史的な伝統に応じられるものとなる）とのこと。（1の16, 17頁を参照）その結果は、モスクワやペトログラードのようなロシアの政治中心を遠ざける（隔てる）、なすに任せられたザカフカージェの独立化過程はその発展に於いて徐々に数段階まで至り、1918年4月にザカフカージェ連邦共和国の独立宣言として終わり、その一ヵ月後には、1918年5月にて、事実上三つの国家樹立、5月26日にグルジア、5月28日アルメニアとアゼルバイジャンで終わった。

1918年から1920年にかけて

て、アゼルバイジャンは独立した議院内閣制の共和国として発展しており、ロシア、トルコとペルシアの間での地域争いの対象となっていた永年の展開を終了し、外国の政治的・軍事的な支援に依存した国際関係の不平等ながらも自主的な主体に変わってきた。例の時期はアゼルバイジャン民主共和国とソ連の平等な関係が記述されたという意味でなく、ロシアのザカフカージェ地域の戦略でのアゼルバイジャンの主要さが強調された。ソ連のボリシェビッキ・リーダーは独立したグルジア・アルメニアに対して一時的な妥協の可能性を認めた結果として例の二カ国と平和条約を締結した一方で、アゼルバイジャン民主共和国に対しては理論上の外交上の認知のヴァリエーションすら除かれていた。アゼルバイジャンは唯一

な戦略地政学的位置をすることと、そしてロシアの第一次大戦及び国内線で衰弱した経済にとって価値のある原料資源に豊富であることが、グルジアとアルメニアより、ソ連にとって極めて重要な目的であった。

その結果、アゼルバイジャン民主共和国の23ヶ月にわたる活動時期はに二つの対立傾向のように記載されている。一方で、アゼルバイジャン側としてはソ連ロシア向けの対等関係を確立する一貫したコースが実現されていた。そのコースは、民族政府のロシアに関わる（「北」の方向）三つの最も大事な課題への客観的な関心を示していたのである。それは、最大最有力な隣国より外交上認知の提供、ロシアとのアゼルバイジャン民主共和国の安全を保障する同等国家関係の確立、ロ

シアとの経済貿易交渉及びバクーの石油と他の輸出製品のロシア市場の復元であった。

他方では、ロシア側としては、アゼルバイジャン民主共和国を外交上否認知、軍事政治的な圧迫、国際舞台での地位の弱体化、コーカサス地域またバクーで合法的に活躍し、国民議会にさえ代理されていたバクーのボリシェビキ団体を利用してアゼルバイジャン国家体制の基盤を内部から決然たる弱体化の政策が行われていた。その政策は、1917年から1921年にかけて旧ロシア帝国にわたる大規模なプロセスの一部であった。外からの干渉、国内線及び先にロシア人民を打撃した赤色テロでのカオスでは、帝国の新たなソビエトフォームの国が設立されていた。その国は新しい（他）社会・政治・イデオロギーのベースで作られていたのだけれども、その指導者らの地政学的な目的が不変のままだった。それは、かつての「郊外地」を収集し、いずれの帝国で慣例的である「中央地」と「周辺地」の相関関係を形成することだった。結局のところは、最初はボリシェビキ的なモスクワのアゼルバイジャン民主共和国に対する政策ではそれをペテルブルク内閣の独裁的なコースの相続順位に置く態度が設けられた。（同列に置かれた）

アゼルバイジャン民主共和国に対するソビエトロシアの戦略とは、ただボリシェビキ指導者の最初の共産主義共和国への経済的な生存を提供する意向として定められたば

かりでなく、優先事項でもあった。ボリシェビキ的なロシアから見れば、地政学的な目的をより効率的に実現させるべく、アゼルバイジャンを占領するということがトルコ及びイランに接近している点、そして中央アジアに近道ルートを与える港を持っている点が新ソビエトロシアの指導にとっての幾つかの戦略的な課題を解決することが可能にするメリットがあったわけである。

第一に、それは、本地域に於いてメンシェビキ的なグルジア及びダシナクツチュン的なアルメニアを今後ソビエト化させるために好い基地を創ることにより、結局のところ、全ザカフカージェエをロシアの支配圏に返還する機会を与えていたわけである。

第二に、それは、他の（競争国）強国よりザカフカージェエやカスピ海、または中央アジアへの侵略通路を遮断できるような防衛課題として重要な役割をも果たしていたのである。

第三に、それは、当時ソビエトロシアの唯一な地域的な同盟国である、反帝国主義的な性分を持っていたトルコの民族解放運動を支援するために有利な条件を与えていた。本運動及びアンカラ政府のリーダーであったムスタファ・ケマルが1920年4月26日にレーニン宛先にロシアとの外交関係を確立提案、そして外国介入戦いに対してトルコへ援助を依頼する内容の手紙が、アゼルバイジャン民主共和国の占領された同時であったということが象徴的である

う。

第四に、1920年4月—5月にアゼルバイジャンでソビエト体制を確立することは、ソビエトロシアを超えて共産主義を推進するべく提唱していた正統派のボリシェビキにとって最も重要な政治的・イデオロギー的な意義を持っていた。それは、ババリア、ベルリン、ハンガリー、スロバキア、バルト諸国などのヨーロッパの国々でソビエト共和国を設立する試みが明らかに崩落した結果として今後の展望の真剣な再評価が求められた、すでに陥落しつつあった「世界革命」プロセスを支える動機となった。バクーでの軍事クーデターは、今度ボリシェビキ政治局に革命をペルシアに向けさせた。アゼルバイジャンを通してこそ、ペルシア左翼団の支援を受け、反政府クーデターを設立する運動が1920年5月半ばに開始し、1921年秋に不名誉に終了した。

そして、アゼルバイジャンでの権威を変化するとともに、プロレタリア的なバクーを共産主義のアイデアを宣伝し、東洋の全民族解放運動をソビエトロシアの「資本主義者と帝国主義者に対する革命闘争」に於ける同盟国として統合させるために地域的なセンターに変えるユニークな機会であった。

第一共和国の独立したイデオロギーや外交政策方向性は、ソビエトロシアの上記の地政学的な利益と交点がなかったのである。まして、後者は、カオスに巻かれ、長引いた内戦そして三国協商より経



済封鎖のようになった状況にかかわらず、ザカフカージェ地域へ及びアゼルバイジャン民主共和国の建国のプロセスに影響を及ぼす主な動因として残っていた。ロシア帝国の旧跡で現れ、多頭政治の雰囲気満ちた第一共和制は当時の無政府状態の終焉とボリシェビキのセンターの独裁政策で全国を統合したことで歴史的な進路を終わらせたのが当然の理であった。

また、アゼルバイジャン民主共和国の崩壊とアゼルバイジャンの占領の重大な原因の一つとしては本地域にて両方ケマルのトルコ及びボリシェビキのロシアの相互支援に関心を持っていたに基づいた戦略的な大志の近接性があげられる。

1920年4月23日にトルコタテ国民議会とムスタファ・ケマルを首長とした国民政府に権力が推移された後、その指導がソビエトロシアとの強力への徹底的な政策コースを取った。ロシアこそがケマル的なトルコの軍事技術・債務・政治的なサポートの唯一な供給源になっていたのである。上述したように、ロシア自身もトルコ大国民議会への支援に関心を持ち、西洋で世界革命を生かせなかった理由で、今後は東洋で、とりわけトルコとイランに於いて、自らの勢力を広げるのに当て込んだ。

本地域での自己位置強化のような目的の共通性及び戦勝国に対する軍事的・政治的な対立の件で相互利益への関心が持たれたことはアゼルバイジャンの将来性を見込みを

もたらさないものであった。アメリカの権威のある学者、タデウシュ・スヴィエトホブスキ氏が、1920年3月—4月にアゼルバイジャンでボリシェビキ革命が組織されるに当たってトルコ的な動因の確かな役割に関して説得力のある論証を立てている。彼は次のように語っている。「当時の春の猛烈な日々の際し、バクーに滞在していたトルコのケマリストらがアンカラ政府のために事象を変えるようと介入したわけである。4月初めに、彼らは、グループを調整する目的で集合した。その関係者の数人が以前アゼルバイジャンの共産主義者と一緒に働き、3月にバクーでのトルコ共産党を組織した人々の中からでもあった。ハリール・パシヤ氏及びフアド・サビット氏からなる調整センターがアゼルバイジャンの危機に対するトルコの政策を定めた決断案を採択した。その主要なポイントが次の3つの通りである。

第一に、現在の英国びいきの政府を迅速に転覆させ、それをボリシェビキらと協力できる政府と交替

第二に、政府の変化を行うために宣伝、印刷、出版活動、そして軍事行動を導くユニットのボリシェビキからなる委員会を設置

第三に、トルコ共産党の要求で赤軍よりバクーを占領—委員会の見解ではアゼルバイジャンの制服を避けねばならぬ。」(3、54頁)

この決断案は東アナトリア戦線にあるトルコ軍司令官

カジム・カラベキル氏に委ねられ、その人の推薦がムスタファ・ケマルの4月26日付けのレーニン当てる有名な手紙の基礎となった。それで、ザカフカージェ地域で絶対的な支配を確立することがボリシェビキよりムスタファ・ケマル政府に軍事技術支援の販路を確保する為に両地域大国にとって必然的であった。そのうちに、アゼルバイジャンの役割はただトルコとロシアを繋げる通路のみならず、トルコの前途有望なボリシェビキ化の過程に補給する資源基盤として高まっていった。その頃はトルコでボリシェビキの宣伝活動が開始し、共産党が合法化された(ムスタファ・ケマルはロシアのボルシェビキの同情を獲得するためにはケマリスト等のイデオロギー及び実地に反するような経過措置を行う羽目になった)

ロシア・トルコ関係でのアゼルバイジャン的な動因の有意義審については、トルコ大国民議会の外交政策の初行為としてアゼルバイジャンへアピールした事が明らかにしている。トルコ大国民議会の開会の日、そしてバクーの捕獲5日間前—1920年4月23日—ムスタファ・ケマル氏はアゼルバイジャンに「トルコの国境をイギリス軍人による攻撃から守るためにソビエト軍を通行させる」ように求めたのである。その上に、著名なケマリスト、また使者であるバクー滞在のハリール・パシヤ氏が赤軍の到来を恐れる理由がなく、そしてその部隊が「ただアナトリアに向かってアゼルバイジャンの領土を通

すことにすぎなく、向こうでトルコ解放戦争に参加する」とアゼルバイジャン民主共和国の政府を納得させようとしていた。(3、54)。スヴィエトホブスキ氏が指摘したように、ハリル・パシャ氏は「すぐに第十一軍の指揮を引き継ぐと言いつつ、ロシアの善意の証拠を提示していた」。

(同上)

数日後、4月26日にムスタファ・ケマルはロシア政府にソビエトロシア及びにザカフカージエの3国に対する新トルコ政府の戦略方針が設定してあった手紙を送った。その手紙にて、ムスタファ・ケマルは「自分の作業と帝国主義の政府を戦う目的でロシアのボリシェビキらとの全ての軍事作戦を組み合わせる」ような責任を取り、アンから政府の本地域での主要な戦略を明確化した—それは、モスクワの政治的・軍事技術的、または財政的な後援を得る代わりに自国の南コーカサスでの勢力範囲の拡張を拒否し、それをロシアの支配域であると認識にすることである。「もしソビエトがグルジアに対して軍事作戦を開始する、あるいは自らの影響力を通じて外交交渉でグルジアを強制的にソ連に入らせ、コーカサスからイギリス人を追放する積りであれば、トルコの政府は帝国主義のアルメニアに対す軍事作戦を負うものとなり、そしてアゼルバイジャン共和国をソ連の中に入らせるように義務付けられている」とトルコのリーダーが約束した。

続いて、ムスタファ・ケマルは提案した「サービスの

価格」をも定めた。「第一に、我々の国民が住んでいる我々の領土を占領している帝国軍を追放する、そして第二に、帝国主義に対する共通闘争を継続できるように我々の内面力を強化するために、ソビエトロシアに最初の援助として金で50億トルコリラ、そして今後の交渉で判断した量での武器や弾薬を与えるように依頼し、その上に、ソ連政府の要求に応じて東洋で作戦行動をとる我々の軍隊のために軍事機器や衛生材料や食料を提供するよう依頼する」(4:51, 321aのフォルダ、54868ファイル、1シート)。

その結果、最短時間でまさにトルコがバクーの占領にあたってソビエトロシアに積極的に支援し、それは今後トルコのリーダーが肯定したものである。「我々の有力な支援のおかげでその軍隊(注: 第10・第11軍)が北コーカサスを通してアゼルバイジャンに簡単に入れたのである。アゼルバイジャン人は到来した軍隊をまったく穏やかに出迎えた。ソ連軍隊はアルメニア・グルジアの国境では必要な軍事的、戦略的な対策を講じ、同時に我々と直接的な関係を確立し始めた」と1920年8月14日にトルコ大国民議会にてムスタファ・ケマルが述べた。(2、368頁)

その後、当時のトルコのロシアびいきの立場に関してソビエト・アゼルバイジャンの代表者らも証明している。ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国に於けるソビエト・アゼルバイジャンの第一

代表者のベフブッド・シャフタフティンスキ氏の外務人民委員代理のレフ・カラハン当ての手紙でも(1920年9月20日付け)「トルコ人はアゼルバイジャンのクーデターの前にそのロシアとの同盟を強く主張し、クーデターが起こるよう大いに助力した」という事実を認めている。(4:51、321aのフォルダ、54859ファイル、7シート)

概して、アゼルバイジャンの独立性に関してトルコの要因が意義ある役割を果たしたのであろう。ヌリ・パシャ氏を首長とする青年トルコ人であれ、アゼルバイジャンでのムスタファ・ケマルの使者で代表されたケマリストであれ、母国のトルコに比べてバクー滞在がより快適そうだったトルコの共産主義者も言わずがな、アゼルバイジャンが実際の独立した国として発展していくことに関心を持っていなかったのである。アゼルバイジャン民主共和国の独立位及び親欧米の方位測定がトルコの利益に対して潜在的脅威として見做されていた。それと同時に、ケマリストらにとっては独立したアゼルバイジャン民主共和国はモスクワとの関係改善のような重要な路にあたって障壁となり、青年トルコ人にとってはコーカサス・中央アジア地域でのトルコの勢力範囲を広げるにあたる邪魔となっていた。

結局のところ、第一共和国の当初からトルコ人は、新アゼルバイジャン国家の軍事的および政治的支援、またその境界の安全保障に客観的な進歩的な任務を遂行しつつ、

独自の戦略目標を追求していた。それは、とりわけ、アゼルバイジャン民族民主運動、第一共和国の国内外政策では（当時できる限りの）独立した方位測定に反して、アゼルバイジャン民主共和国の指導の中でバクーで汎テュルク主義者及び汎イスラム主義者をトルコの使者からの支えの形として現われた。

1920年の最初の数カ月で彼らはアゼルバイジャン民主共和国の政府でのポリシェビキ、アンカラ政府がアゼルバイジャンを通路国に変化させる計画につながる人物を公然と支援していた。このように、1920年春にトルコの民族主義者ら及び共産主義者らが共同で努力し、モスクワ政府・バクーのポリシェビキらのバクー市の他にアゼルバイジャン民主共和国の地域での政権を握る意志をはっきりと支援したのも論理上の結末であろう。1918年半ばにアゼルバイジャンの国民をダシナク党・ポリシェビキのアライアンス側からのジェノサイドから助けてくれ、アゼルバイジャン民主共和国を建国するつもりのアゼルバイジャン愛国者の努力を支持したトルコは、1920年春に自らの外交政策を反対側に変えさせたのである。

その結果、ロシア及びトルコの要因は、その後アゼルバイジャンを占領し、ソビエト化のプロセスに際して補助的な要素となった。◆

#### 参考文献：

- 1 Меморандум, предъявленный находящимся в Константинополе Почетным представителем держав Антанты членом Правительства Азербайджанской Республики, Чрезвычайным Министром-Посланником при Правительствах Блистательной Порты, Армении и Грузии Али Марданбеком Топчибашевым (ноябрь 1918). Баку, 1993. Истанбул市中に居る三国協商の名誉代表にアゼルバイジャン共和国政府の一員、オスマン帝国、アルメニア及びグルジアの政府に臨時特使より提出された覚書（1918年11月）。バクー、1993
- 2 Краснов В.Г., Дайнес В.О. Неизвестный Троцкий. Красный Бонапарт (документы, мнения, размышления). М., 2000. V. G. クラスノフ, V. O. ダイネス、『未知のトロツキー・赤きボナパルト（資料、意見、考察）』、モスクワ、2000
- 3 Свиетоховский Т. Русский Азербайджан. «Хазар», №3, Баку, 1990. タデウシュ・スヴィエトホブスキ、『ロシアのアゼルバイジャン』、ハザール出版社、3号、バクー、1990
- 4 Архив внешней политики Российской Федерации (АВП РФ), фонд 04 «Секретариат Чичерина. 1919-1930». Россияの外交政策のアーカイブ、第4基金、「チチエーリンの事務局. 1919-1930」
- 5 Азербайджанская Демократическая Республика (1918-1920). Армия (документы и материалы). Баку, 1998. アゼルバイジャン民主共和国（1918-1920）、軍隊（資料）、バクー、1998
- 6 Азербайджанская Демократическая Республика (1918-1920). Внешняя политика (документы и материалы). Баку, 1998. アゼルバイジャン民主共和国（1918-1920）、外交政策（資料）、バクー、1998
- 7 Азербайджанская Демократическая Республика (1918-1920). Парламент (стенографические отчеты). Баку, 1998. アゼルバイジャン民主共和国（1918-1920）、議会（速記報告）、バクー、1998
- 8 Азербайджанская Демократическая Республика (1918-1920). Законодательные акты (сборник документов). Баку, 1998. アゼルバイジャン民主共和国（1918-1920）、法律（資料集）、バクー、1998